

# アートNPOの地平（ライフレビューアートへ）

Ground Level of Art NPO (life review art)

鈴木敏春

Toshiharu Suzuki

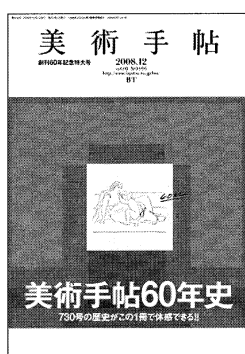
## はじめに

特定非営利活動法人愛知アート・コレクティブが2002年の発足から7年を迎えた。活動は、ここに来て新しい手応えを感じるようになった。この論文は、以前書かれた「アートNPOの地平」の続編であり、書き下ろしである。また、愛知アートコレクティブの活動の記録でもある。（関係する事項の年月は西暦とした。）

## ライフレビューアートへ

### 1、はじめに

アメリカのリーマンブラザーズの経営破綻に端を発した世界金融不況は、昨年末からこの国を席卷し、特に派遣労働者やワーキングプアと言われる人たちの生活を直撃している。これはセーフティネット<sup>(注1)</sup>に対する政治の無策と言う事が出来るが、経済の自由主義化とグローバリズムに因るところが大きい。これは経済に限ったことではなく、戦後日本におけるアメリカのライフスタイルやポップ・カルチャーの影響が強く、政治、経済、社会、教育にいたるまで「アメリカの影」の浸透は早かった。特に美術の世界では1960年代から70年代の「アメリカ現代美術」の影響は凄まじかった。昨年12月の「美術手帖」の創刊60年の見開きを見れば、この国の美術の流れが視覚的にも良くわかる。（特集 美術手帖60年史～730号の歴史がこの一冊で体感できる！）美術手帖は、戦後すぐの1948年に創刊してから2008年で60年、人間で言えば昨年で還暦を迎えた。特に60年代にはアメリカの現代美術の紹介を中心とした紙面が展開された。それは同時に高度経済成長に裏づけされた消費社会の到来であったとも言える。



1980年代から本格的に始まった大衆消費社会や現在の「格差社会」では、同じ労働であっても働き方によって全く違った賃金体系が許される社会になってしまった。（同一賃金、同一労働、最低賃金の破綻）そこには働く側の権利はなく、専ら資本の側に有利に作られている。大衆消費社会では、消費が優先し労働の価値などは問題にもされなかった。労働の中身を問題にする労働価値説<sup>(注2)</sup>は誤りで、商品化や使用価値を中心とする価値形

態論<sup>(注3)</sup>が正解だと言わんばかりである。実際、大衆消費社会においては、同様の使用価値を持つ商品でも、ブランドのロゴが付いているだけで数十倍の交換価値を持つてしまうことがある。そのことが価値形態論の優位を導き出すことになる。80年代は、総体的にバブル景気で大衆的に賃金が上昇した錯覚で、労働価値説のことは表面化しなかった。しかし、「格差社会」においては、「ワーキングプア」<sup>(注4)</sup>といった言葉に象徴されるように、労働の抽象性が崩壊していることが明らかとなり、労働価値説のセーフティネットが問題化されるようになる。「抽象的人間労働」は近代資本制につきまとう亡霊なのである。労働価値説は、今日の社会では決して実現されないだろうが、かといって払拭されることもない。マルクスがそうであったように、貨幣フェティシズムの秘密は、商品フェティシズムに含まれていると見なされるのである。これは明らかな間違いで、労働価値説こそ、重要なポイントである。

アートは作品を販売するという経済的な行為のなかで、商品化の呪縛にかかり、初めから商品フェティシズム<sup>(注5)</sup>に飲み込まれている。これは特にスーパーフラット<sup>(注5)</sup>などの論議に見られる如く、フィギュアアートやショッブ化した作品に著しい。作品が売れるという事が持てはやされるあまり、交換価値としての価値形態論が先行し労働価値説のような制作過程の意味を見出す事が不毛とされる。アートは何の疑問も持たずに顧客ニーズを的確につかんで製品計画を立て、最も有利な販売経路を選ぶこととなり、金儲けとして商品化される。そしてそれに飽き足らない部分で常に<sup>やま</sup>疾しさだけが残るのである。

### 2、パブリックアートの破綻

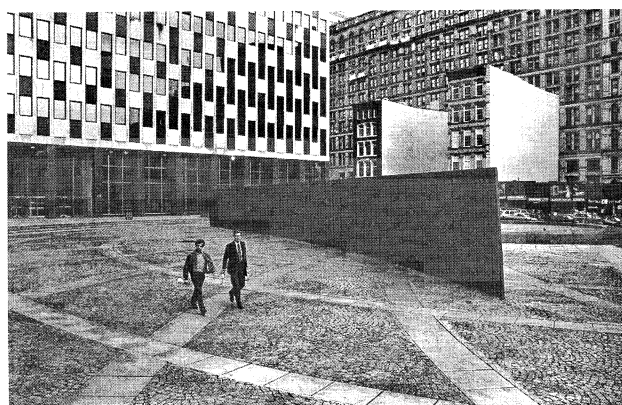
世界同時経済不況は1930年代のアメリカの大恐慌を彷彿とさせる。そのことはルーズベルト大統領によって進められたニューディール（新しい契約）芸術政策を思い

起こさせる。ニューディール政策は一般的には大規模な公共工事による雇用の創出が言われるが、目玉は人々に夢と希望を与える文化的な芸術プロジェクトの設立にあった。それは壁画制作と教育プログラムの奨励や600名にも上る芸術家の雇用などが含まれる。ニューディール政策で最初に行われた芸術プログラムは、「公共事業芸術プロジェクト(PWAP)」である。プロジェクトは6ヵ月間続き雇用プログラムとして公共建築や公園に設置する芸術作品を制作することでアーティストに職を与えた。芸術への支援は国民の精神を高め、アメリカ文化を育み、国家に新たな文化的精神を吹き込む成果をもたらした。当時、ルーズベルト大統領が考えていたことは、1941年3月ナショナル・ギャラリーの竣工式の演説にも見ることができる。「アメリカ国民は、芸術とは外国からやって来るもの、他の大陸から輸入されるもの、彼らの時代のものではないもの、自分が関わらないもの、休日や祝日に警備された建物へ見に行くものである。と評論家や教師から教えられてきた。しかしこの数年間で、われわれは自分たちが芸術を所有していることに気付きは始めている。」その後、芸術・文化の社会的便益についての研究に加え、芸術を享受する観客に関する分析も進む。美術館の空間の拡大＝公共空間の拡大、公園や公共建築物の中に作品が展示されるようになって行く。建物建設に伴う「アートのための%」プログラムの導入は、芸術への投資が経済活動の新たな需要や雇用創出など「景気対策にも寄与する」することを証明した。

アメリカの現代美術の転移は、その後、吹き荒れたマッカーシズムの屈折した反共主義を経て、1960年代に至り、アートの流れがヨーロッパからアメリカに移行するのは良く知られたことである。公共空間でのパブリックなアートの展示が始まるが、それはかつての富裕な財閥のパトロンに替わる中産階級の市民の登場であった。

この事を表す象徴的な事件としてリチャード・セラの『傾いた弧』撤去事件が挙げられる。1981年、ニューヨークのマンハッタンの連邦ビル前広場に、巨大な錆びた鉄板を弓形にそらせた『傾いた弧』が設置された。ところが、ビルに働く人々のあいだから、景観の邪魔になる、それに、もし倒れでもしたら危険この上ない、と抗議の声が起こり、結局、作品は8年後に取り払われた。この作品の登場は様々な議論を呼び、作品は撤去されたものの都市空間の様々な問題を提起した。「公共」という考え方が市民の側からの異義申し立てにより論争となる。

これは市民社会の成熟度が増した証明でもあった。背景としては展示する「場」のパブリック・ヒストリーの研究の広がりがある。この事件を機にパブリックアートの流れが大きく変わって行くことになる。実際、アメリカでは90年代から環境アートや、多民族国家を繋ぐコミュニティアートなど、様々なオルタナティブアートが登場した。そこではアートが地域コミュニティにもたらす社会的便益が強調された。



▲R.セラ『傾いた弧』1981年

日本での公共的な意識は、国家が国民に法や政策を提供し、指導するという啓蒙的なものが多い。そこでは全ての事柄が共通の利益として決められ、公益性、情報の公開性が求められる。しかしこれらは「タテマエ」でしかないのが「ホンネ」であり、国家と公共が一体であるという認識から、国家が常に公共を提供し定義する意識が一般的となっている。

身近なところでは、碧南市の藤井達吉現代美術館問題がある。1990年代、詩人の永島卓氏が市長に就任。彫刻のある街作りを推し進め、この地方では碧南市は文化先進市と言われてきた。いわゆるパブリックアートの奔りである。昨年4月の市長選で美術館問題が争点になり、経済的な税収の落ち込みを理由に前市長の文化政策を批判した市長が当選した。市は市議会の賛同が得られないことを理由に購入予算1500万円を断念した事が新聞に報じられた。藤井達吉美術館なのに藤井の作品は少ない。「ぜいたく品で、市税が落ち込んでいる今は購入時期ではない」(中日新聞)と言うのが市議会の見識らしい。それでは何のために美術館を作ったのか。経済・税収の落ち込みで全てを語る悪しき見識としか思えない。文化政策で必要なのは情報開示と、市民参加である。議会や行政側はそのことを今も見抜く事ができていないのでは



の空と大地の間展（2008年10月4日～12月7日・碧南市藤井達吉現代美術館）「まちを彩る彫刻たち」と題された企画展が開催された。企画展では論争の具体例として、「何が問題なのか」が紹介されていない。これでは前市長の顕彰としか見えて来ない。注目すべき事は碧南市がこれほどの野外彫刻を集め、文化先進市としての役割りを示していた事である。そのことに驚きと敬意を感じた。美術館側は3月にはアンデパンダン展などを企画しているが、今後の活動が注目される。それは彫刻、アートの概念を市民のレベルへ、ムーブメントとする事が必要であろう。つまり新しいアートの必要性が求められる。

### 3、回想法としてのアート

1990年代に入ってめざましい展開を見せている回想法・ライフレビューの動きは高齢者社会を迎えるなかにあって注目を集めている。従来、ノスタルジーや回想は「過去に執着する否定的な行為」とされていた。元々はアメリカの精神科医であったロバート・バトラー（R. Butler）のライフレビューという考え方に基づく。回想法は、バトラーによって1960年代初頭に始められた心理療法である。バトラーは、高齢者が「老いの繰言」として疎まれていた思い出について語る行為も意味があるものだと考えた。高齢者の回想は「過去との折り合いをつけて未来に向う」「生きてきた意味を再考し、自尊心を高める」などの心理学的な意味がある。自分の人生を整理し、むしろ奨励されてよい自然で、普遍的な過程である。主に高齢者を対象としたものと考えられているが、これは認知症や自閉症にも対処できうる。今では健常な高齢者についても、身体的健康のみならず、精神的健康

をも維持することの重要性が再認識されている。つまり認知症や精神的ケアに有効とされる。

方法は簡単に言えば、「1対1もしくは少数の集団で、昔の思い出などを語る」ということになる。こうした昔語りこそが回想法である。これは日常の中で自然と行われている。そのため、何も特別なものとは思わないが、昔の事を語ること、そのものに意味がある。またそれは現在の置かれている状況を把握するすべを提供する。

高齢者の回想法ではしばしば「手続き記憶」が活躍する。手続き記憶とは、自転車に乗る、大根を包丁で切るなど、言葉で説明できないが「身体」が覚えた記憶、つまり「身についた記憶」である。手続き記憶は、年齢を重ねても、たとえ認知症になっても残りやすいとも言われている。五感をフルに使い、身体を繰り返しくぐりぬけた体験は忘れられにくい。

記憶は「写された写真」でなく「描かれた絵」になる。すなわち「正しい」記憶がそのまま残ることはまれで、厳密に「正しい」記憶など存在しない。記憶は歳月と共に、塗り替えられバージョンアップされる。問題なのは記憶が「正しい」かは、それ程重要ではない。脳に残る記憶は幻想であり、心のメタファー（比喩）とも言えるからである。人生のネガティブな記憶を、楽しく、希望に満ちたものへ塗り替え、想像力を豊かにふくらませ、今の思いを未来へ繋げていく。そこにこそアートの起つべき可能性がある。

### 4、回想法アートの試み実施例

記録活動記録としての「ライフレビューアート」は、第一段階として似顔絵を描きながらインタビューをする。対象となる高齢者の方から、好きなものや仕事、家族などの個人史を聞き取りをし、その情報を元にして空き箱にコラージュしながらお一人の個人ミュージアムを制作する試みを行なった。

#### 事前の準備について、

プログラムの導入を打ち合わせする。（参加者の募集）回想を促す手がかりとして似顔絵を活用する。制作された作品を展示。展示を交えた交流会の開催。  
展示／日時2008年11月18日（火）～12月10日（水）まで  
展示。午前10時～午後4時 場所／特別養護老人ホーム「オーネスト桃花林」1階 喫茶室画廊

小牧市大字上末字道場580番地 1

電話 0568-78-3300

出品者／名古屋造形大学・メディア造形・交流造形3年生8名 協力／オーネスト桃花林の入所者の皆さん。  
主催／（福）紫水会オーネスト桃花林・アート講座実行委員会 後援／名古屋造形大学アートプロデュースコース研究室

1回目／アートNPOの地平（講義）

10月20日（月）大学

一回目はアートNPOの必要性、歴史的な流れから具体的なアートNPO作りまで、映像を使った講義。施設での自分のネームプレートの作成を行なう。

講義の内容は以下のとおり。

A、NGO・NPOが必要とされる事情

B、最近の「アートNPO」の歴史的背景

（A、Bについては「アートNPOの地平」鈴木敏春  
名古屋芸術大学紀要 2007年に詳細）

2回目／10月27日（月）

二回目は特養老人ホーム「桃花林」施設見学。6名の入居高齢者と面談。似顔絵を描き、聞き取りメモの作成。

ミュージアムボックス制作用の資料作り。

スケッチブック、色鉛筆等筆記用具、コピー資料、アンケート持参。急がず時間をかけて、繰り返し繰り返し語られる対象者の言葉を、こころをこめて聴く。あまり誘導したり、時間的順序を正したりはせずに、聴く。

似顔絵を描きながらインタビュー。生まれ育ったところ、好きな食べ物、以前の仕事、健康のための心掛けなどを記録カードにメモをしながら記録する。下の写真は学生の似顔絵に覗き込むAさん92歳。高齢だが昔の記憶ははっきりしている。東京の高円寺に家があった。近く



に日蓮宗の大きなお寺があったことなどを話す。4回目の学生との交流で、学生の出身が蒲郡と分かったとAさんは昔、蒲郡プリンスホテルに夫と泊まった事を思い出した。普段、伏せがちな表情が一瞬明るくなった。その後、施設の展示会場に娘さんと訪れ、昔話をして下さった。施設は07年の4月にオープンしたが、参加者の高齢者にAさんと同じ東京から入居されたKさんが見え、その後、喫茶室で会話が弾む。下の「ちくちく」が、Kさんをテ



▲ちくちく

ーマに制作された作品。Kさんも同じ92歳。戦前には都立大学の前で洋裁店を営んでいた。昔は海軍さんの将校の奥さん方を集めて洋裁教室を行っていたという。今でも施設内で元気に刺し子を制作している。

11月4日（火）大学

三回目は回想法アートとしての「ミュージアムボックス」の製作。

展示用の空き箱、接着剤、はさみ、カッター

取材メモ・アンケートを題材にしてミュージアムボックスの制作を行なう。

箱はお菓子や靴箱など身の回りにあるものを使用。コラージュを箱のなかに学生が埋めていく。実際はお年寄りが制作する方法（コラージュ療法）もありうるが、今回は学生が対象者の個人のミュージアムボックスを作る事に主眼を置いた。作家としての学生の参加である。2回目に参加出来なかった学生は自分の祖父母のミュージアムを作る事で参加した。ただ最近は核家族が多く祖父母と同居していない現実直面した。12名の講座であったが結果的には8名のみの参加。

「家族」を保持する活動力（＝家事）はモノを介して、見えてくる。初めて会う他者の記憶でさえ、引き続き、記憶に止めることで幾度も物語ることで回想し想起することを促す効果がある。

11月17日（月）

四回目は「ミュージアムボックス」の展示。

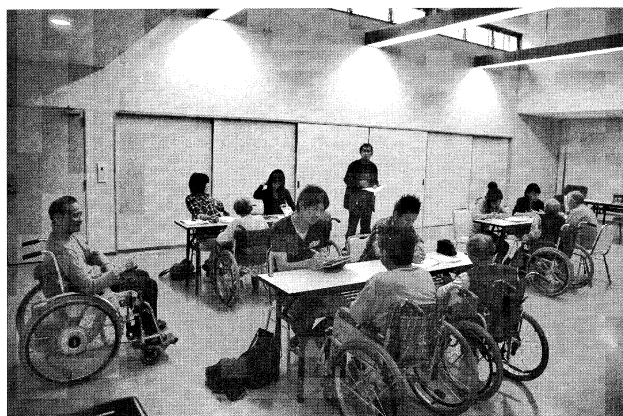
展示・記録と交流

似顔絵と個人のミュージアムボックスの展示は、過つての思い出を語るのに十分な根拠を与え、昔話をすること



で脳の活性化を促進させ、生きる意欲の増進に役立つ。開設してまだ一年ほどの施設であったが、入居者間の話題作りとなり、会話が生まれるようになった。車いすの人が多いので、学生の提案により展示の目線を低くしたり、現場での作業の展開が良い試みとなった。このような認知症のケアは、認知を生きる一人ひとりのところに寄り添うような、また一人ひとりの人生が視覚的になるようなかわりが求められる。そのために、現在の暮らしを知り、彼らが生きてきた軌跡を折に触れて語っていただけるようなかわりを作らねばならない。このようにして、テキストとして一人ひとりの「世界」そのものを一つの「翻訳」として微細に映しだしてゆく表現のプロセスの探究こそ、私たちのもっとも重要な課題である。

今後も継続した活動が続け、教育機関の積極的な協力を期待している。



▲似顔絵描き



左の作品は雪の日に祖母が下駄で通学したために良く転んだ話をミュージアムボックスとして制作したもの。印象深い事柄がうまく表

現されている。展示されることで同時代的な体験が共通の話題を生む。

これらの交流を通して施設内での会話が進み、次の企画に進むことができた。



▲集合記念撮影と交流会

## 5、認知症・自閉症を生きるアートへ

### 老後のすまい

100人待ちと言われる特別養護老人ホーム（特養）は慢性的な人員不足と画一化された食事、排便、入浴、をこなす。人間の尊厳という理想と現実の間にある。小牧市で5年程まえからアートNPOで福祉施設職員を対象にした美術講座を行ってきた。人間の尊厳を大切にする「アート回想法」もその一つだが、福祉現場では非常に評判が悪い。それは非効率で常に人員不足の特養では非生産的だからである。

アートの制作講座がどれだけ参加した人たちの心の支えになったか分からないが施設内での広がりを感じるばかりである。

よく「終の棲家」と言う言葉がある。そこで思い描くのが残念ながら「特養」と「病院」。私の母は晩年を特別養護老人ホーム（特養）で過ごした。死期を感じると人間はかつての一番辛い「思い出」が蘇る。40年ぶりに会った叔父の一人に母は「家が焼けちゃったね」と泣きながら語りかけた。意識はしっかりしていた母が、どうしたのかと戸惑ったが、昭和20年3月10日の東京大空襲で淀橋の家が全焼し、その時、祖父と3人で命からがら逃げ惑った事が思い出されたのだった。涙ながらに叔父に語りかける母の顔が忘れられない。

北川フラムさんの講演会の打ち上げの夜に弟からの電話で誤飲による急性肺炎で意識がなくなり、病院へ強制入院となったことを知らされた。特養の話では連絡が付かず緊急入院させたと言っていたが、「看取り介護」の打ち合わせの段階であった。緊急治療室で「かあさん」と呼びかけてみたが、反応はなかった。すでに母の体には何本もの管が入れられていた。なによりも衝撃を受けたのが、口に挿入された呼吸器と、首を弓のようにのけぞらせた体勢であった。気道を確保するためであろうということは理解できるが、あまりにも不自然なその姿勢に言葉を失った。この非人間的な延命治療に多くの家族が付き合わされるのが日本の医療の現状である。

2006（平成18）年4月、改正介護保険制度が施行され、「看取り介護加算」が導入された。その年の大晦日に母は病院で亡くなった。

### 「紙版画で年賀ハガキを作ろう」

2008年末に紙版画による年賀状づくりを行なう。

講師は源安孝さん（イラストレーター）

日時／12月21日・日曜日午後1時～4時

対象／施設入居者の皆さん、ご家族の皆さん、施設の職員の皆さん、小牧市民の皆さん

場所／特別養護老人ホーム「オーネスト桃花林」交流室  
「源安孝イラスト展・年越し年賀展」

展示／12月12日土曜日から来年1月10日土曜日まで。

場所／特別養護老人ホーム「オーネスト桃花林」喫茶画廊

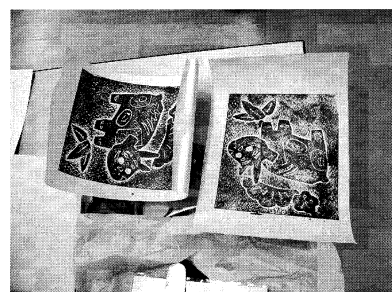
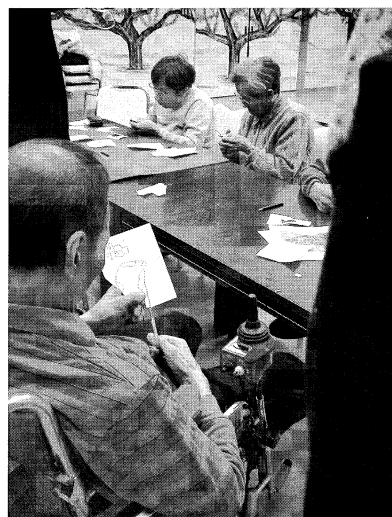
紙版画講座は午後1時～4時 12名参加。施設内のお年寄りとの年賀状づくり、用意された4種類の好みのイラストをはさみで切り抜き、台紙に貼り付け印刷をする。地域のボランティアの方も3名参加。軽い認知症の方も

参加。前日の参加意向が改めて説明を要する事態になり、約30分遅れで始まる。以前、身体障害者援護施設にいたMさん（68歳）も参加。彼はパーキンソン病であるが、ものづくりが好きで、前の施設でも織物講座（05年）に参加している。65歳過ぎて特別養護老人ホームに転居してきた。軽い認知症のOさん、Mさんの二人もハサミを持って図柄を切り始めると、夢中にな

って作業を進める。これは前出の「手続き記憶」が機能しているようだ。昔から手先を使う作業をしていたらしい。実際、制作作業は施設の職員の方より早い。印刷することの感動も人一倍。帰りに講師の源さんからのカレンダープレゼントも喜ばれた。時間から時間の作業はともすると、カルキュラムの通り行かない場合も多く、今回の経験も得難いものとなった。「おくれ」は楽しい事も、不快なストレスへと変えてしまう。ここでの版画は図柄を選択してプリントする楽しさにあり、印刷することの興味にある。そこには納期など存在しない。『「おくれ」は文明の抱える巨大な「成果」であり、文明はそういう「おくれ」に対して、本当はもっと寛大に、誠実に対応すべきなのである。』



すべきなのである。「おくれに見せかける」人たちだけを基準にして、世の中を計るのではなくて、『「おくれ」が現実存在す





ることを認め、もっと誰もが抱えているものとして、『おくれ』を計算に入れる尺度をもった社会を創ってゆくべきなのである。」（自閉症・村瀬学）このことは実際の現場に立って初めて分かりうる事柄でもあった。

老いという現象は単に身体の高齢、事実の喪失としては語りえないものを内包している。つまり、問題は老いという事実、喪失という事実を、一人ひとりの老いゆく者たちがいかに自らの体験とするか、というところにある。そこに「ライフレビューアート」の立つべき場がある。

## 6、「ライフレビューアート」の作家

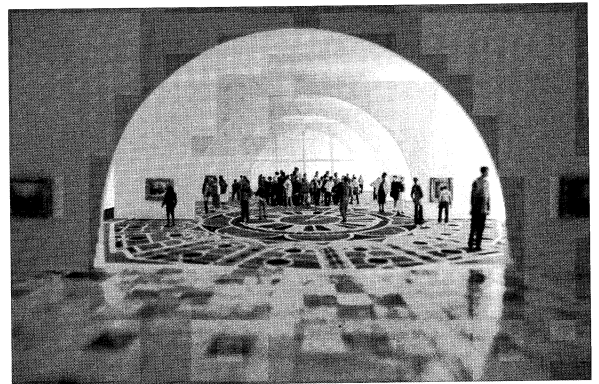
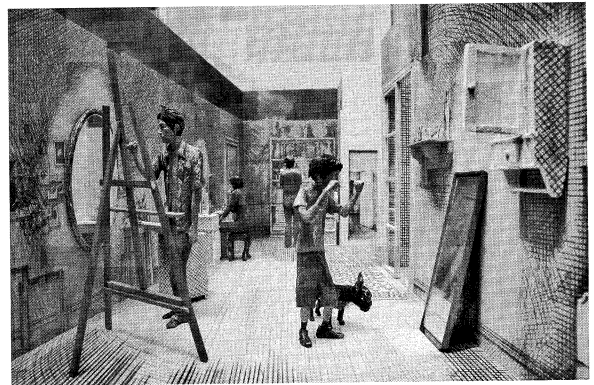
学生の仕事を紹介したが、「ライフレビューアート」としてこの地域でも関連した現代美術作家の発表活動を見る事ができる。

### 杉山健司・浅田泰子の仕事

杉山健司さんの劇場型視きからくりは、観客と製作者の境界を乗り越え、主体と客体の在り様を転倒させる。二つの部屋で構成された作品は覗き見ることで観客を入れ子状態にする。鏡に映った展示物の人形は外部の現実を再現するものとして存在するのではなく、あくまでも構造化された固有の語りとして自己完結する。覗けば覗くほど、人々の欲望は拡大する。意識的に構成された作品はその事を意識した想像力の賜物である。

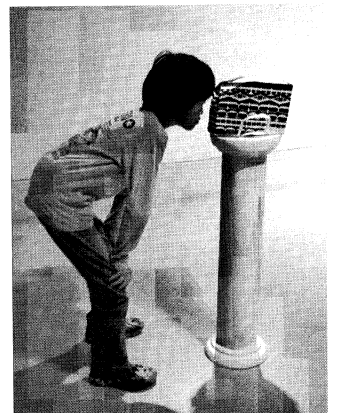
2008年9月26日から10月12日に名古屋市市政資料館で開催された「Who is inside?」あなたは誰ですかという自主企画展は杉山、浅田夫妻と息子と愛犬による家族展であった。そこには各自から見た覗きカラクリの世界が展開され、回想される物語の世界がのオンパレードする。

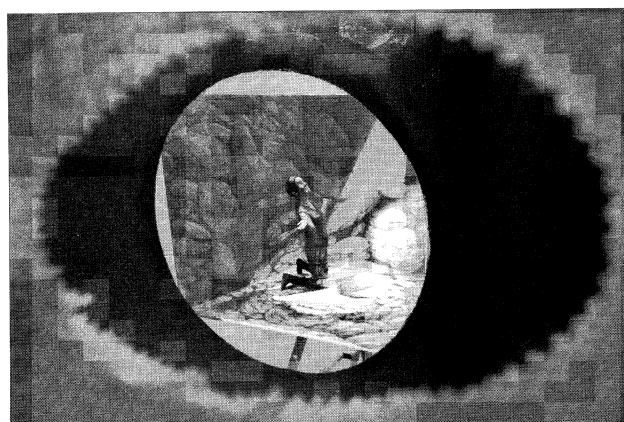
この家族展が画期的な事は余り知られていない。それは、「家族」というものが、極めてプライベートなものとして扱われ、閉鎖的な空間、家庭内労働として、必然的労働として背景へと追いやられてきたからだ。だが、表現としての「家族」は政治的に利用され、権力の行使の不可視な装置として存在してきた。すなわち性別役割分業に通じるジェンダーの構築のためにあり、男女愛の貫徹、市場経済のための労働力再生産、未成年者の教育・社会化の場としてあるという考え方として機能してきた。また、「家族」はケアされる場としてもある。どの



ような人であれ、家のなかで誰かに依存し、ケアされることで生を取り戻し復活することが出来る。それは共に生きる生に愛を注ぐことである。だが多くの事件や研究で明らかなように、家族はもっとも暴力的で抑圧的な場にもなりうる。彼らのインスタレーションは家族が共に過ごす場（＝ホーム・家）においてどのような時間が流れているのかを見せてくれる。それは愛犬の目まで通して見えてくる。ケアする他者を気づかい、自らの必要と欲張りにも心をくばり、視覚的な世界をやさしさを提案している。

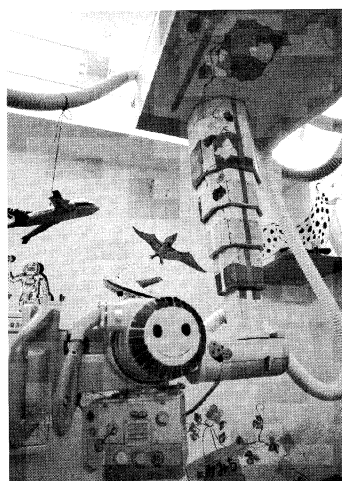
上の作品は杉山健司さんの個展でのもので、家族の日常が箱のなかの世界に立体的に展開されている。ここでは「家族」はホームとして対話的に捉えられて制作されている。それはコントロールする事ではなくフィールドとして視覚的に存在する楽しさを見るものに与える。





紙袋のなかには様々なミュージアムが存在し、それらからイメージされるドローイングカードが部屋の中に展示された。現代美術作品の多くは、一個の生の豊かさ、他者を愛することの意味、慈しみ育むことの有り難さ、それらを経験しているにも関わらず、その事を作品化していない。その意味を深く感じる「家族展」であった。

浅田泰子さんは2007年に「他者のまなざし展」で日常のワーキングを問題化した。散乱する広告チラシや食品



パッケージなどの裏側に書き付ける仕事を展開している。他方でまた、子供のレントゲン室をアートで飾る仕事など様々な仕事に関わる。これはジェダー的な視点もあり興味深い。多くの美術館の世界では、子供や障害者が意識的に排除され、必要とするアー

トの現場から締め出されるのは納得がいかない。このようなレントゲン室の作品はホワイトキューブな美術館機能に対する告発にも似ている。

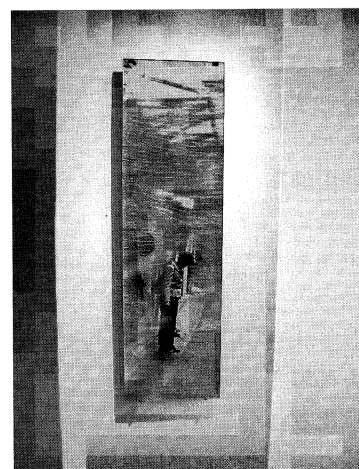
### 進化する記憶

長谷川哲展Crossing

2007年4月14日（土）～30日（月） galleryフィールアートゼロ 名古屋市天白区八事

場所のイメージを強烈に残す空間であった。ギャラリー『フィールアートゼロ』が移転のための最後の企画展として開催したのが長谷川哲さんの個展だった。この場所は再開発による取り壊しが予定される建物で、すでに多くの住民が退去した後だった。ギャラリーの反対側から間違って建物に足をふみいれたとき、郵便受けには転居不在の張り紙が張られ、階段の薄暗がりの中に死を待つ静寂さが包み込むように辺りに漂っていた。

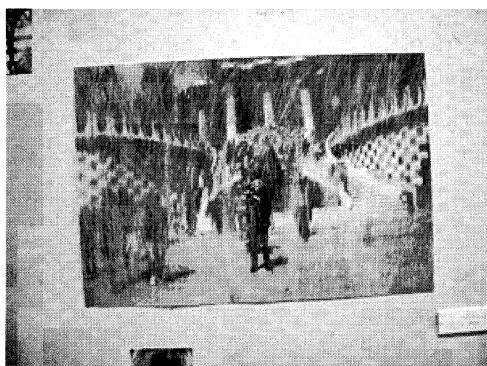
長谷川さんの今回の発表は新作が中心で写真の作品は『Revelation-3』（啓示）でモノクロトーンの中に人物像が浮かび上がる。まるでベンヤミンの「パサージュ論」のように、世界の都市の景観を「遊歩者」の如く写真に記録していく。それは長谷川さん自身でもあり、ファンタスマゴリー（幻燈装置）であり、印画紙に焼き付けられた記録の残像である。バルトが言うように「写真が数かぎりなく再現するのは、ただ一度しか起こらなかったことである。」その言葉を彷彿させるように、記録された写真の中から改めて拾い出すように人物が立ち現れる。写真は「記憶」と「記録」の二面性を兼ね備えながら作られていく。この作品も以前撮影された「記録」の中に実在した人物が彼の手によって甦る。流れる現像液の中から拾い出すように時空を超えて浮かび上がる人々。それは長谷川さんによって無意識に蘇った人であり、「可視化」する事で「遊歩者」から抜け出す唯一の方法でもあるかのようだ。長谷川さんはこのギャラリーが無くなり、破壊されて消えゆく場であることを訪れた人々に語りかける。思い出の





場であり交流の場として位置づけ、空間自体を見る者の意識の中に残す。

ここで「可視化」とは視覚問題でも心理問題でもなく独自の構造的問題である。作品は写真の他に対比するかのよう「書物」がある。書物は「記憶」と「記録」への問いの構造としてある。最近の仕事で登場する「書物」は時間や歴史を現し、写真との関係で語られるオブジェだが、細部への関心がこれからの面白みになるだろう。なぜ表現者で有り続けるのか。なぜ「浮遊者」で有り続けなければならないのか。それは彼にとっての切実な問題であり、表現する事の根幹のような気がする。（※長谷川さんはライフレビューアートで2008年10月に「家族」をテーマに特養「桃花林」で開催。）



▲2009年「Finder」展からスナップショットより

## 7、アウトサイダー・アート

映画館は満席であった。そこにはヘンリー・ダーガーを渴望する若者の姿があった。最近、若い人々に人気があるアウトサイダーアートは、ヘンリー・ダーガー<sup>(注6)</sup>がその先鞭を付けた。2007年に東京の原美術館が開催した「少女たちの戦いの物語ー夢の楽園」展。貧困と孤独の内に亡くなった彼の生涯は映画にまでなる。貧しさと孤独の逆境を生きたことの中から両性具有の少女が生まれる。それは差別としてあり、「表現」としては悲しい物語でしかない。



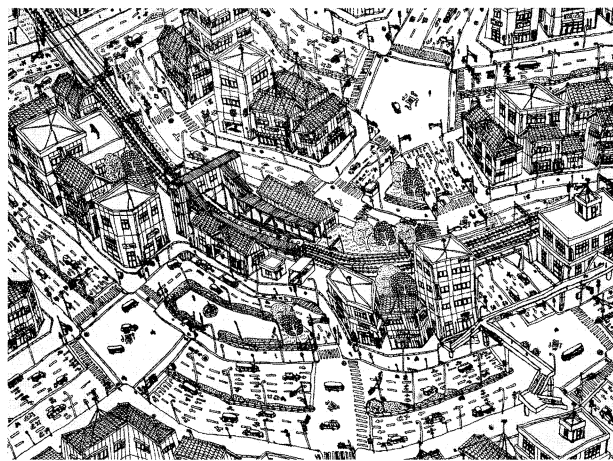
▲ヘンリー・ダーガー

アウトサイダーアートは一般的には正規の美術教育を受けない人々をさす。最

近発行された「宿命の画天使たち」<sup>(注7)</sup>の本の中で美術評論家の三頭谷鷹史さんは、知的障害者の描く鳥瞰図は児童画の要素が非常に強いと指摘する。児童画の影響が色濃く、美術教育の過程でデッサンなどを通し、描き方が矯正される。つまり美術教育が決められた描き方を教えてきたと言える。障害者の場合、逆にそこから自由闊達な表現が生まれる。それが見る人々に感銘を与えるのだが、社会的にはアウトサイダーと呼ばれる。しかし描かれている作品そのものはインサイダーである。最近の動きとしては、さらに差別を定着させるような名称であるアウトサイダーアートとして捉えるよりも「ボーダレスアート」（境界なきアート）として展開されている。

### 辻勇二さんの絵

ヘンリー・ダーガーと対照的に、辻さんの作品は記憶の中の風景を眺望し、鳥になったかのような自由な、伸び伸びとした世界を表現している。本人を眼の当たりにして謎が解けたような気がした。自閉であるが明るい性格なのか、作業所の休日に自宅の窓辺で絵は制作される。



辻勇二さんは1977年に豊橋市の岩田に生まれた。愛知県立豊川擁護学校高等部を卒業後、豊橋市の「福祉村」にある障害福祉サービス事業所「明日香」に通う。「明日香」は、福祉村の中にある施設で、障害を持つ人達が作業や様々な活動を通しての社会参加を目標に、支援活動を展開している。1995年、豊橋の老舗画廊喫茶「フォルム」での個展を皮切りに、



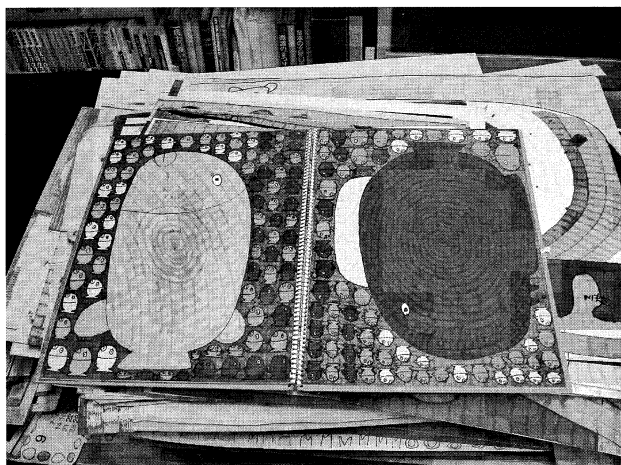
発表活動を開始する。様々な美術展での入選や受賞を経て、2005年のアウトサイダーアート展「描かずにはいられない」(高浜かわら美術館)でアーティストとして注目を集めた。昨年開催され、NHKの新日曜美術館で取り上げられ話題となった「アールブリュット／交差する魂」展<sup>(注8)</sup>でも活躍するアウトサイダーアーティストである。

辻さんは子供の頃から絵の才能に恵まれ、小学校の頃から続く絵日記には、彼の平穏な日常の記録が綴られている。楽しい旅の記憶、車窓から眺める町並み、旅先の東京タワーから展望した風景など。絵日記には今も楽しい思い出が描かれる。軒を連ねて並ぶ民家の屋根瓦は彼の一番好きな風景である。雑誌のインタビューを行った豊橋市役所の最上階にあるレストランでも、眼下に流れる豊川と血液の如く流れる国道一号線と周辺の屋根をじっと眺めていた。

#### 服部憲政さんの絵

服部憲政さんは1971年名古屋生まれ。幼児期に自閉症と診断される。1990年豊川擁護学校高等部を卒業後、辻さんと同じ障害福祉サービス事業所「明日香」に通う。1995年に「干支作品コンクール」でデビュー。アウトサイダーアートの展覧会で数多くの賞を受賞。彼の絵はナイーブアートに近く、丹念に塗りこめられた色彩が美しい。魚や動物テーマにしたものが多く、独自のハイブリット化した動植物達がボーダーなイメージを生む。

アートの世界ではアウトサイダーアートとして括することで、排除の論理が生まれる。そこにはニーズ中心の福祉社会が形成され、自閉症という言葉の定着と同じく、アートでも違う世界が常に用意される。それは福祉や美術を巡る問題の中にあり、文化的抑圧や疎外の一方向的な



構図は専門家と言われる人々の中に根強く存在する。

「自閉症概念の混乱あるいは誤用、さらに差別用語としての定着という事態は自閉症研究者の責任のらち外にあるのだろうか。筆者はこのような事態をもたらした少なくとも一つの源泉は専門家の自閉症論そのもののなかにある、と考えている。また近年の児童精神医学界は自閉症論にかぎらず、脳神話の復活を思わせるようにすべてを脳に還元しつつしてみせる生物学主義と病児あるいはその家族への社会的、道徳的非難を基調とする心理主義とに二分しつつ退廃の極みに達している。そして国家はこのような傾向をきわめて巧妙に障害児・者差別に利用しているのである。」(自閉症とは何か 小澤勲 2007年 洋泉社)

ふれあいアート展(2008年10月29日～11月3日 名古屋市民ギャラリー矢田)この企画展は県内に3千人程の会員を有する愛知県知的障害児者生活サポート協会の主催で開催された。作品は精神障害、知的障害、自閉などを抱えながら表現活動に活路を見出す事を目的としている。ここでアートは日常的な受け皿として働いたのである。応募作品201点全てを展示した。私たちは事務局の知的障害援護施設・サンフレンドの川崎純夫さんから相談され審査・展示に参加した。サンフレンドは70年代に「虹の絵師」と言われた山本良比古さんを見出した施設であり、山本良比古さんは知的障害、難聴、言語障害の三重苦を負いながらもその才能を伸ばした。作風は精密な点描法と原色を使った鮮やかな色彩による独特のもので「虹の絵師」「昭和の北斎」と称され、山下清の再来とまで言われた。その彼の作品も展示され、数十年ぶりに展示室に掲げられた絵は、日の目を見、点描画の晴れやかな色彩を見せてくれた。山本さんは障害のため絵を描くことさえ出来なくなり、現在はこの施設で暮らしている。

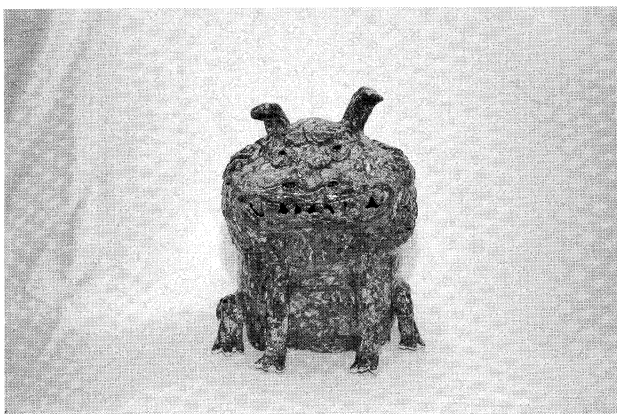
施設で活躍するアウトサイダーアーティストの多くは作品発表の場と公平な批評を望んでいる。新聞を見てきたという市内の母子は粘土のワークショップに参加。母親は初



▲山本良比古「犬山城」



▲ふれあいアート大賞「鉄人28号」山邊一成



▲中日新聞社社会事業団賞「狛犬」安藤昇

めて粘土の団子に文字を描く息子に驚き、彼にそんな才能がある事を初めて知った。ここで一番感じた事はアートが多くの人々に希望を与え感動を与えるというごく普通のことである。

## 8、結語

近年、「アートNPO」に対する関心が高まりつつあるのは歓迎すべき事ではあるが長年に亘り、活動家として関わってきた筆者にとって、ここ10年程の動きは目まぐるしいものがある。文化予算が国や地方自治体に付くと、それに関わる学会とか言うものがすぐに立ち上がる。その多くはアリバイ作りによるもので、ほとんどがデスクワークのみを行い体を動かすことはしない。「アートNPO」は体力とフットワークの行動力である。「アートNPO」は人々との間にアートやデザイン活動を通して、福祉や町おこし、環境問題、人権など様々な場所に

活動のステージを作って行く。これらの活動はさらに発展して行くだろう。特に「福祉」の現場では人間の尊厳を確保する活動にも繋がっている。これから「アートNPO」に参加・協働を目指す若い人に期待すると共に、団塊の世代の活動家にも戦線復帰をお勧めする。また、多くの貴重なアドバイスを頂いた友人の団塊の世代の彼・彼女らに、この場を借りて、感謝を捧げたい。

### 脚注

(注1) セーフティネット safety net

(比喩的に) 社会的・個人的な危機に対応する方策。雇用保険、生活保護、年金、預金保険、融資に対する信用保証などの安全策。

(注2) 労働価値説 labour theory of value

人間の労働が価値を生み、労働が商品の価値を決めるという思想。アダム・スミス、デヴィッド・リカードを中心とする古典派経済学の基本思想として発展し、カール・マルクスに受け継がれた。

(注3) 価値形態論

マルクスは資本主義社会にかんする科学（＝資本論）の中で、超歴史的な価値の「実体」がまさにどのようにして商品の交換価値という特殊歴史的な「形態」として表現されるのかをしめすことを説いた。マルクスは「労働価値論」の自明性を古典派にもまして徹底的に信じていたからこそ、「価値形態論」なるものを展開しえた。

(注4) ワーキングプア working poor

正社員並みにあるいは正社員としてフルタイムで働いてもギリギリの生活さえ維持が困難、もしくは生活保護の水準以下の収入しか得られない就労者の社会層のことである。直訳では「働く貧者」だが、働く貧困層と解釈される。

(注5) スーパーフラット Superflat

現代美術家の村上隆さんが積極的に提言している。平板で余白が多く、奥行きに欠け遠近法的な知覚を拒むなど、伝統的な日本画とアニメーションのセル画とに共通して見られる造形上の特徴を抽出した概念。現代美術の文脈に、日本特有のオタク文化の美意識を導入するために用いられる。村上隆さんの戦略性は、美少女フィギュアなどの立体的な造形作品をもスーパーフラットと称している。また最近では、評論家の東浩紀さんが、この概念を用いたり、現代建築のある種の傾向がスーパーフラ

ットの比喩で語られたりするなど、現代美術の枠を超え、広く現代の文化全般に関わる概念として使われることも多くなった。

(注6) ヘンリー・ダーガー Henry Darger (1892年～1973年)

両親との早い死別、知的障害施設への収容を経て、青年期から81歳で亡くなるまで、完全な孤独の中で、膨大な量の物語と絵画を制作。現在、作品は「アウトサイダー・アート」として世界の主要な美術館を巡回している。

(注7)「宿命の画天使たち」／三頭谷鷹史著

国民的画家「山下清」の過ごした八幡学園での日々、学園のもう一人の天才画家、沼祐一にもスポットを当てた知的障害児たちの評論。美術の観点から問題にされなかった彼らの作品にも迫る労作。

(注8) アールブリュット

「生の芸術」という意味のフランス語。artは芸術、brutはワインなどが生(き)のままであるようすをいい、画家のジャン・デュビュッフェが1945年に考案したカテゴリーである。

正規の美術教育を受けていない人が自発的に生み出した、既存の芸術のモードに影響を受けていない絵画や造形のこと。精神を病んだ者による芸術、というニュアンスは持っていないが、精神の療養の手段として絵を描くなどの創造行為が有効であるとしばしば考えられるため、治療の一環として描いた絵が後にアール・ブリュット作品として評価を受けるというケースが多い。ヨーロッパでは、差別的な芸術作品として見られることが多く、収蔵された作品の作家が、収蔵を拒否するケースもある。

2004年

- ・「野外美術展の系譜」 鈴木敏春 2006年 名古屋造形芸術大学紀要12号
- ・「アートNPOの地平」 鈴木敏春 名古屋芸術大学紀要 2007年
- ・「リア」 展覧会批評 長谷川哲 2007年
- ・「宿命の画天使たち」 三頭谷鷹史 2008年 美学出版
- ・地球応援誌「そう」第22号 2009年 アート点描

## 参考文献

- ・ <http://www.rawvision.com> Raw Vision
- ・「アウトサイダー・アート」 服部正 2003年 光文社
- ・「パブリックアート政策」 工藤安代 2008年 勁草書房
- ・「自閉症とは何か」 小澤勲 2007年 洋泉社
- ・「介護施設で看取るということ」 甘利てる代 2007年 三一書房
- ・「自閉症」 村瀬学 2006年 ちくま新書
- ・「痴呆を生きるということ」 小澤勲 2003年 岩波新書
- ・師勝町歴史民俗資料館 研究紀要14 博物館と回想法